定説通りから新発見・新情報で実像に迫る

宮崎の実像に迫る新発見・新情報

名前（村上浩一）

一、グリーンザウルスの正体

□これは、宮崎産ピーマンの名前である。あの「促成栽培」で冬春にかけて出荷されるピーマンである。「おいらはピーマン、太陽育ち、お日様いっぱい食べたのさ」という歌詞で始まる「野菜の王サマンボピーマンボ」というCD（http://www.oidonkun.com/で視聴可能）までつくって売り出している。

二、日本一のピーマン王国

□2004年の生産量では、茨城県を僅差でおさえて、日本一を達成している。その理由は、促成栽培のみならず「抑制栽培」をはじめとした産地の気候や地形に合わせた栽培方法にある。例えば、山間部では露地・普通栽培、平野部では促成栽培、高台では抑制又は半促成栽培をするという具合である。下の農事暦を見ればわかるように、1年間を通した出荷を可能にしている。もちろん、方法だけでなく、品種の違いもある。

三、土呂久公害

□高千穂の土呂久という箇所では、1920年から1962年年まで砒素を含んだ亜砒酸が生産されていた。集落の中に窯を築き、鉱山から掘り出した硫砒鉄鉱がそこで焼かれ、焼き殻は土呂久川に捨てられていた。砒素や重金属の混じった水や粉塵は、虫や家畜、農作物を侵し、ついには人間に砒素中毒の症状が出始める。この亜砒酸は殺虫剤、除草剤、防腐剤等の原料として、また毒ガス兵器の材料として使用されてきた経緯がある。1971年に告発され、1990年に和解が成立している公害病である。公害学習においては、4大公害病だけでなく、ぜひ取り上げていきたい問題である。

（熊本市立一新小学校教諭）